



Title	ドイツ語における「結束性」をめぐって(2)
Author(s)	林, 馨子
Citation	独語独文学科研究年報, 22, 29-43
Issue Date	1996-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/26021">http://hdl.handle.net/2115/26021</a>
Type	bulletin (article)
File Information	22_P29-43.pdf



[Instructions for use](#)

3. 「殻のかたいもの」「殻のかたかないもの」「殻のやわらかいもの」

3.1 再分析仮説

2.1.1 で見たように、Bech (1955) は、外置されていない場合には、残余域の要素が入り交じることを示唆している。しかし、次の文が示すように、外置されていなくとも、要素が入り交じることを許さない場合がある。

- (3-1) (a) weil sie der Student zu küssen versucht  
(b) \*weil sie der Student zu küssen vorschlägt

Grewendorf (1988: 278)

どちらの文においても、‘der Student’ が主節の主語であり、‘sie’ が不定詞の目的語である。このように、どちらも外置されていないにもかかわらず、(a)と(b)の間に差が出ているのである。このように、動詞によって、残余域の要素の配列の変化を、許したり、許さなかったりすることが、ほかに、Haider (1986: 76)、Stechow & Sternefeld (1988: 408)、Fanselow (1989: 2) でも指摘されている。

Grewendorf (1988) は、これを、その動詞が「再分析」動詞であるかどうか、ということの説明を試みている。例えば、次の文(a)は、もともと(b)のような構造を持っているが、「再分析」(Reanalyse) によって、(c)のような構造になることがある。

- (3-2) (a) weil der Lehrer es zu erklären versucht  
(b) weil der Lehrer [<sub>VP</sub> [<sub>S</sub> [<sub>S</sub> PRO [<sub>VP</sub> es zu erklären]]] versucht]  
(c) weil der Lehrer [<sub>VP</sub> es [<sub>V</sub> [<sub>V</sub> zu erklären] [<sub>V</sub> versucht]]]

Grewendorf (1988: 278)

(3-2b)では、‘es zu erklären’ が一つの文として、埋め込まれているが、(c)では、それが「解体」され、全体で一つの文、単文構造を成すに至っている。Grewendorf (1988) によれば、再分析の仮説とは、次のようなものである。

(3-3) Restrukturierungshypothese

Bestimmte Verben des Deutschen erlauben mit eingebetteten adjazenten Verben die Bildung eines komplexen Verbs, wobei zwischen diesen Verben intervenierende Kategorien-Grenzen getilgt werden.

ドイツ語のある動詞は、埋め込まれた、隣り合った動詞と、一つの複合動詞を形成することが許される。その際には、この動詞の間を隔てる範疇境界が、削除される。

Grewendorf (1988: 278)

このように再分析されうる動詞は、普通の単文の場合と同じように、要素の配列の入れ替えを許すので、(3-1a)のような結果が出る、というのである。このような「再分析」による説明と同じ種類の説明、つまり、もとの構造が何らかの変化を起こす、と考えているものには、Evers (1975)、Stechow & Sternefeld (1988)、Hayashi (1994) がある。

そして、Grewendorf (1988: 276) によれば、次のような動詞が再分析されうる、とされている。(なお、何故 'vermögen' と 'beschließen' が、括弧内に入っているのかは不明である。それについての説明は、全くない。)

(3-4) versuchen, hoffen, beginnen, anfangen, vergessen, fürchten, (vermögen, beschließen,) beabsichtigen.

一方、再分析されないものには、次のような動詞が挙げられている (Grewendorf (1988: 275) 参照)。

(3-5) aufhören, bedauern, leugnen, schwören, zugeben, begehren, trachten, verlangen, wünschen.

(3-3)の再分析仮説によって説明されるのは、残余域の配列に関してのみではない。凝集表現についても、同様の説明がなされる。凝集表現とは、言い換えれば、埋め込まれた節の中に位置する否定の意味が、それより上位にある節にまで影響を及ぼす、ということである。次の例を見てみよう。

(3-6) weil Peter es niemandem zu sagen versucht hat.

Grewendorf (1988: 280)

この文では、次の二つのどちらを意味することもできる。

(3-7) (a) Peter hat nicht versucht, es jemandem zu sagen.

(b) Peter hat versucht, es niemandem zu sagen.

(b)のような解釈をする場合、確かに‘niemandem’は凝集表現の形をしてはいるが、その否定の意味は、‘versucht hat’まで及ぶことはない。ここでは、再分析は起きておらず、‘niemandem’は‘zu sagen’の節の中にとどまったままである。ここで、注意しなければならないのは、(b)のような解釈をするためには、再分析が起らない場合を想定しておかなければならないことであろう。「選択的再分析プロセス」(optionaler Restrukturierungsprozeß (Grewendorf (1988: 277)))と言われるのは、このためである。先に挙げた(3-4)の動詞は、選択的に、再分析を受けることができるのであって、必ず再分析を受けるわけではないのである。

一方、次の例を見てみよう。

(3-8) weil der Kanzler niemanden zu sehen wünschte.

Grewendorf (1988: 276)

この文は、次の(a)の意味には解釈できるが、(b)のように、解釈できない。

(3-9) (a) weil der Kanzler wünschte, niemanden zu sehen.

(b) weil der Kanzler nicht wünschte, jemanden zu sehen.

これは、‘wünschen’が再分析されない動詞(3-5)に属するからだとされる。また、先程の例(3-6)と同様、(3-8)の‘niemanden’は、凝集表現の形はしているが、この否定の意味が(3-7a)のように、広い範囲に及ぶことはないのである。

また、再分析できる動詞と、できない動詞との間には、次のような違いもある。

(3-10) (a) \*weil der Lehrer zu beweisen vorschlägt, daß der Satz gültig ist.

(b) weil der Lehrer zu beweisen versucht, daß der Satz gültig ist.

Grewendorf (1988: 281)

(a)のように、埋め込まれた動詞‘beweisen’の目的節である、‘daß der Satz gültig ist’は、動詞を二つ越えて外置されることはないが、これが、(b)のように、再分析できる動詞を使えば、可能

である。これは、(b)の文が、(3-2b)ではなく、(3-2c)のように再分析され、単文と変わらない構造を持っているからだ、と考えられる。

このことは、その他の例からも、支持されると思われる。動詞を二つ越えている場合には、(助動詞の他に) (3-4)で挙げられているような、再分析できる動詞しか見当たらないからである。例を挙げると、

(3-11) (a) und die Worte bewegten ihn so wunderbar, daß er zu beurteilen vergaß, ob ...

/2/

(b) Ich werde im folgenden zu zeigen versuchen, daß ... /3/

同様の例については、最後の例文/4-/5/を見られたい。

ただし、次のような例がある。

(3-12) Und außerdem bitte ich das Gericht, zu bedenken, daß es uns ganz mühelos gelungen ist, die geplante Versammlung zu vereiteln, indem ... /6/

動詞‘bitten’は次の例が示すように、残余域の配列の変化を許さないで、再分析できない動詞だと思われる。

(3-13) \*weil es mich der Max abzugeben bat

Haider (1986: 74)

上の例(3-12)では‘bitte’が、第二位の位置にあるので、梓構造(右梓)がはっきりしない。だから、この文に対応する daß 節は、次の(a)(b)のうちの、どちらの可能性もある。

(3-14) (a) [ Und außerdem bitte ich das Gericht [ t<sub>i</sub> zu bedenken]], [daß es uns ganz mühelos gelungen ist, die geplante Versammlung zu vereiteln, indem ...]<sub>i</sub>

(b) [ Und außerdem bitte ich das Gericht t<sub>i</sub>], [[ t<sub>j</sub> zu bedenken], [daß es uns ganz mühelos gelungen ist, die geplante Versammlung zu vereiteln, indem ...]<sub>j</sub>]<sub>i</sub>

しかし、上の例(3-12)では、埋め込まれた不定詞節‘zu bedenken’が、コンマによって主節から分かたれている。これは、境界休止(2.1.2 参照)を示し、従って、(b)のような構造をしている可能

性が高い。つまり、不定詞節全体が抜き出されていて、daß 節は、そこから動詞一つ（‘zu bedenken’）を越えて抜き出されていると考えられるのである。

さて、次の対比は、

(3-15) (a) weil der Lehrer das Theorem versucht zu beweisen.

(b) \*weil der Lehrer das Theorem vorschlägt zu beweisen.

Grewendorf (1988: 279)

のようなものである。(a)を Grewendorf は「動詞入れ替え」の例だ、としている。動詞入れ替えを行なうためには、その動詞は同一の結束域に属していなければならない (2.1.3 参照)。しかし、例文(2-17)に関して述べたように、Bech (1955) は、この場合の二つの動詞は、同じ終端域には属さない、としていた。しかし、そもそも終端域の配列を決定する条件自体が、不確定な部分を含んでいることも示唆しておいた。2.1.3 で挙げた三つの条件を、もう一度見てみよう。

(3-16) ①上部域が現れる条件：上部域は、下部域を前提とする。

②動詞の並び方：上部域では、支配する動詞が、支配される動詞の前に位置するのに対して、下部域では、支配される動詞が、支配する動詞の前に位置する。

③上部域に含まれる動詞の「状態」：上部構造には、定形、または、第一状態の動詞しか含まれない。

この三つの条件だけでは、(3-15a)の文の動詞が、同じ終端域に属することを排除できない。まず②に関して、(3-15a)の文では、動詞が二つしかないので、もし、一つの動詞 ‘versucht’ を上部域に、もう一つの動詞 ‘zu beweisen’ を下部域に仮定すると、それぞれの域内に他の動詞がないために、条件②は無効となる。そして、下部域 ‘zu beweisen’ が存在するとすると、条件の①も満たされる。また、上部域は ‘versucht’ で、この動詞は定形なので、条件③も満たされてしまう。だから、Grewendorf が、(3-15a)の二つの動詞を同一の終端域に属するとし、その上で、動詞入れ替えが行なわれている、としても何ら不思議はない訳である。

しかし、さらに Grewendorf は、この条件そのものも変えている。次の例を見てみよう。

(3-17) weil Peter versucht anzufangen abzunehmen.

Grewendorf (1988: 279)

これも、彼によれば、動詞入れ替えの例と考えてもよい。‘versuchen’も‘anzufangen’も、再分析されうるからである。しかし、ここでは、動詞が三つある。上の条件①と②を満たすためには、この三つの動詞を次のように上部域と下部域とに配分しなければならない。

(3-18) versucht anzufangen abzunehmen



‘anzufangen’は下部域に属することはできない。もし‘anzufangen’が下部域に属するとすると、下部域における動詞の並び方が、支配関係に関する並び方の条件②に反するからである。そこで、条件③が変更されることになる。つまり、上部域には、第二状態の動詞も入れる、という旨の変更である。

さらに、第三状態の動詞も、上部域に入ることができるとされる。

(3-19) Peter hat das Examen versucht zu wiederholen.

Grewendorf (1988: 279)

ここで、‘versucht’が、上部域に属している、というのだが、こうなってくると、これは不自然な論であると思われてくるのである。それは、なぜか。次の例を見てみよう。

(3-20) als er im Schlaf angefangen hatte, zu murmeln, war sie erschrocken hinausgerannt.

Bech (1955: § 117)

この例は、(3-19)と同じ形だが、als 節の中に入っているため、定動詞が後ろに移動している。その定動詞の位置に注目していただきたい。Grewendorf の予測では、この定動詞 ‘hatte’ は、‘angefangen’の前におかれてもよいはずなのだが、そうではなく、後ろにおかれている。(3-20)では ‘hatte’ が ‘angefangen’ の第三状態を支配しているのだから、これは(3-16)の②の条件によれば、下部域を構成するといえる。つまり、この文では動詞の入れ替えが行なわれているのではなく、‘zu murmeln’ が外置された形なのである。同じ形をしていながら、定動詞の位置が違うだけで、一方を再分析、もう一方を外置の構造と捉えるのは、不自然ではないであろうか。(3-19)も(3-20)と同様、外置の構造であると考えたほうが、自然なのではないだろうか。それとも、さらに条件②まで変更しなければならないのか。無理のない説明をするならば、(3-17)も、(3-18)のような動詞の入れ替えで

はなく、次のような、外置の構造を持つと考えられる。

(3-21) weil [ Peter  $t_i$  versucht ] [  $t_j$  anzufangen [ abzunehmen ] ] $_j$ ;

‘anzufangen’ が外置され、そこからさらに、‘abzunehmen’ が外置された形である。

### 3.2 「殻のかたいもの」「殻のかたくないもの」

では、次の対比はどう考えられるのか。

(3-22) (a) weil der Lehrer das Theorem versucht zu beweisen.

(b) \*weil der Lehrer das Theorem vorschlägt zu beweisen.

どちらも、「普通の」外置はできる。

(3-23) (a) weil der Lehrer versucht, das Theorem zu beweisen.

(b) weil der Lehrer vorschlägt, das Theorem zu beweisen.

従って、ここでは、そもそも外置できるかどうかの問題なのではない。問題は、‘vorschlagen’の場合、埋め込まれた節が、何かを「残して」外置されることはない、という点にある。逆に言えば、‘versuchen’の場合は、何かを「残して」外置できるということである。そして、何かを残して外置するという操作は、次のようなものだと考えられる。

(3-24) (a) weil [ der Lehrer [ das Theorem zu beweisen ] versucht ]

(b) weil [ der Lehrer das Theorem $_i$  [  $t_i$  zu beweisen ] versucht ]

(a)が初めの構造だとすると、外置される前の構造が(b)である。外置されるまとまりが、どのような範疇であるかはわからないが、そのまとまりの外に ‘das Theorem’ が出ていつている。そして、そのまとまりが外置されると、(3-22a)のような形になるのである。一方、‘vorschlagen’の方は、外置そのものは容認される訳だから、次に示すように、外置より前の段階、つまり、‘das Theorem’ が出ていくことができないのだと考えられる。

(3-25) (a) weil [ der Lehrer [ das Theorem zu beweisen ] vorschlägt ]



(b) \*weil [ der Lehrer das Theorem; [ t<sub>i</sub> zu beweisen] vorschlägt]

これが、‘vorschlagen’ の持つ特徴だと考えられる。‘vorschlagen’ に埋め込まれている節に含まれている要素は、容易に取り出せない。いわば、その「殻がかたい」のだ、と考えられるであろう。

ただし、次の例を見ていただきたい。

(3-26) (a) im Bayernkurier vom elften Oktober stehen zwei Sätze, die ich mit Genehmigung des Herrn Präsidenten bitte vorlesen zu dürfen.

Kvam (1983: 216)

(b) Der Gefangene wurde freizulassen geraten

(a)のように、‘vorschlagen’ と同じ種類の動詞の場合も、埋め込まれた節から、要素が抜き出されるようだが、これは、文頭の位置に限られるようである。(b)も、同じ例だと考えられる。

「殻がかたい」という特徴を‘vorschlagen’ の種類の動詞に与えることは、これとはまた別の、次のような現象も、同じように説明する能力があるように思われる。それは、何もこの問題だけに限った特徴ではない。実は、最初に述べた、残余域の配列に関する現象からもわかることである。例文(3-1)が示していたように、

(3-27) (a) weil sie der Student zu küssen versucht

(b) \*weil sie der Student zu küssen vorschlägt

‘vorschlagen’ の場合、埋め込まれた節の要素(‘sie’)と、その他の要素(‘der Student’)が交じることはない。これは、もし、(3-25b)のように、そもそも自分の属する節を出ることができないのだとすれば、当然の結果である。自分の節を出てもいない要素が、どうして他の節の要素と入り交じることができるだろうか。

また、動詞連鎖の前置も、同じ特徴を示す。

(3-28) (a) zu stören gewagt hat mich niemand

(b) \*zu stören aufgefordert hat Max mich ihn

Fanselow (1989: 3)

この現象は、Haider (1986: 77) でも指摘されている。これも、‘auffordern’ に埋め込まれている節の「殻がかたい」と考えれば、素直に説明することができる。

- (3-29) (a) [ hat niemand [[ mich zu stören] gewagt]]  
(b) [ hat mich<sub>i</sub> niemand [[ t<sub>i</sub> zu stören] gewagt]

- (3-30) (a) [ hat Max mich [[ ihn zu stören] aufgefordert]]  
(b) \*[ hat Max mich ihn<sub>i</sub> [[ t<sub>i</sub> zu stören] aufgefordert]]

どちらも(a)がもとの形、(b)が前置される前の形である。(b)から、二つの動詞を含むまとまりを抜き出せば、(3-28)になる。しかし、これが(3-28b)のように‘auffordern’の場合で不可能なのは、埋め込まれた節の「殻がかたい」のだとすれば、そもそも、埋め込まれた節から、何らかの要素が出ていくことが、許されないからである。それが(3-30b)に示されていることである。一方、‘wagen’に埋め込まれた節の「殻はかたくない」ので、その中の要素が出ていくことを許し(3-29b)、残ったまとまりが前に移動され、(3-28b)が出来上がる、と考えられる。この、前に移動するまとまりについては、先程の外置と同様、どのような範疇であるかは、はっきりしないが、Huang (1993) らの考えるように、動詞連鎖そのものではなく、それを含む句の単位が移動している、と考えてよいであろう。

### 3.3 「殻のやわらかいもの」

このように考えてくると、次に問題になるのが、この例である。

- (3-31) verstehen können wird er sie kaum

Stechow & Sternefeld (1988: 411)

(3-31)も、(3-28a)と同じ形をしている。(3-28a)が、「殻がかたくない」、つまり、自由に要素が出られるということで説明されたのなら、この例も、同様の説明を与えるのが、最も自然であろう。

- (3-32) (a) [ wird er [[ sie kaum verstehen] können]]  
(b) [ wird er sie<sub>i</sub> kaum<sub>j</sub> [[ t<sub>i</sub> t<sub>j</sub> verstehen] können]]

(b)のように、要素が抜き出され、残ったまとまりが前に移動するのだ、と考えれば、統一的な説明

がなされる、と言えるであろう。

今、問題になっているのは、助動詞、話法の助動詞であるが、次の文を見ていただきたい。

(3-33) »Gut«, sagte Nicola, »ich hätte das vielleicht nicht auf deine Tür schreiben  
sollen, Nino. ...« /7/

この文を daß 節に変えてみると、次のようになる。

(3-34) daß ich das vielleicht nicht auf deine Tür hätte schreiben sollen.

これは、動詞入れ替えの文である。先程は、第二状態の動詞を含む文で、「動詞入れ替えに似ているもの」を、その中の要素が出ていくという操作+外置の操作で説明した((3-24)参照)。では、この「動詞入れ替え」も同じように、説明できないであろうか。

- (3-35) (a) [daß ich [ das vielleicht nicht auf deine Tür schreiben sollen] hätte]  
(b) [daß ich [ das vielleicht nicht auf deine Tür]<sub>i</sub> [ t<sub>i</sub> schreiben sollen] hätte]  
(c) [daß ich [ das vielleicht nicht auf deine Tür]<sub>i</sub> t<sub>j</sub> hätte [ t<sub>i</sub> schreiben  
sollen]<sub>j</sub>]

(a)はもとの構造、(b)は動詞以外の要素が出ていった構造、(c)はその後、外置された構造である。このように考えれば、説明はできる。ただ、ここで必要なのは、話法の助動詞‘sollen’に埋め込まれた節も、助動詞‘hätte’に埋め込まれた節も、「殻がかたくない」ことを示すことである。まず動詞を、話法の助動詞と、それが支配する動詞だけにしよう。

- (3-36) (a) »Schaden kann es nichts«, entschied der Kapitän. /8/  
(b) ...und sorgen wollten sie alle gemeinsam für Momo, weil ... /9/

- (3-37) (a) [ kann es [ nichts schaden]]  
(b) [ kann es nichts<sub>i</sub> [ t<sub>i</sub> schaden]]  
(c) [ [ t<sub>i</sub> schaden]<sub>j</sub> kann es<sub>i</sub> nichts t<sub>j</sub>]]

(3-37)は(3-36a)の派生の過程を示したものである。(3-36b)も同様にして導かれる。‘nichts’ ある

いは ‘gemeinsam für Momo’ が、埋め込まれた節を抜け出しているために、(3-36)のような文が可能になるのである。

次に、助動詞 ‘haben’ および ‘werden’ と、それが支配する動詞だけにしても、同様のことが確認される。例を見てみよう

- (3-38) (a) ..., aber geklungen hat sie (= Musik) ganz tief in mir drin. /10/  
(b) Na, belobigen wird man uns ganz bestimmt nicht. /11/

従って、先程の動詞三つの文(3-34)においても、‘hätte’ に支配されている節、および、‘sollen’ に支配されている節のどちらも、「殻がかたくない」ので、その中から要素を抜き出すことができ、その残りを外置することによって導きだせると考えられる。

しかし、この要素の抜きとり、という操作は、この場合、義務的であると考えられる。これは、一つには、「普通の」外置ができないからである。

- (3-39) (a) \*daß ich hätte, das vielleicht nicht auf deine Tür schreiben sollen  
(b) \*daß ich sollen/gesollt hätte, das vielleicht nicht auf deine Tür schreiben

また、「ねずみ捕り構文」ができないことも、義務性を示していると考えられる。2.1.5 の例文(2-11)をもう一度見てみよう。

- (3-40) (a) \*...ein Umstand, den berücksichtigen er immer muß  
(b) \*...ein Umstand, den zu berücksichtigen er immer pflegt  
(c) \*...ein Umstand, den berücksichtigt er immer hat

(a)を例にとって考えてみよう。

- (3-41) (a) [ er immer [den berücksichtigen] muß]  
(b) \*[[den berücksichtigen] er immer muß]

(3-40a)の形を導くためには、(3-41b)のように、関係詞 ‘den’ は、‘berücksichtigen’ の形成する節を出ることなく、前に移動しなければならない。しかし、助動詞 ‘muß’ に支配された節にある要素、すなわち ‘den’ が、義務的にその節を出ていなければならないのだとすれば、(3-41b)のような

構造はありえないことになる。その代わりに、次のような派生をすると考えられる。

- (3-42) (a) [ er immer [den berücksichtigen] muß]  
(b) [ er immer den<sub>i</sub> [ t<sub>i</sub> berücksichtigen] muß]  
(c) [ den<sub>i</sub> er immer t'<sub>i</sub> [ t<sub>i</sub> berücksichtigen] muß]

(b)で‘den’は、埋め込まれた節を抜け出し、(c)で、関係詞として、さらに前に移動している。その際‘den’は既に‘berücksichtigen’とは無関係なところにいるので、これを一緒に連れていくことはできない。つまり(3-40a)のような文は不可能である。一方、(3-40c)が生み出す文は容認できるのである。

(3-43) ...ein Umstand, den er immer berücksichtigen muß

このように、埋め込んでいる節から、義務的に要素が抜き出されなければならないもの、埋め込まれた節の、殻が「かたくない」というよりも、「殻がやわらかい」ような動詞は、次のものである。

(3-44) 完了の助動詞、話法の助動詞、lassen、brauchen、scheinen、pflegen

なお、その他の類似の例文は、最後にまとめて載せてあるので、参照されたい (/8/-/26/)。この種類の動詞は、次の現象について、同じふるまいを示す。まず第一に、ねずみ捕り構文ができないこと(例文(3-40)参照)。第二に、埋め込まれた動詞の前置を許すこと(例文(3-36)参照)。第三に、「普通の」外置は許さず、動詞入れ替えを示すこと(例文(3-34)参照)。このことは、別の見方をすれば、この三つの現象が、同じ原理によって導かれるのが、自然だということを意味する。それが、義務的な要素の抜き出し、つまり「殻のやわらかさ」である、と考える。(完結)

\* 本稿は本年報の前号(独語独文学科研究年報、第21号、1994年、北海道大学ドイツ語学・文学研究会、30-45頁)に掲載された『ドイツ語における「結束性」をめぐって(1)』に続くものである。なお例文一覧、文献表についても、本稿にまとめて掲載してある。

## 例文出典

次の例文一覧の出典を示す。

- Bech, G. (1955): Studien über das deutsche Verbum infinitum, Band I. Kopenhagen.
- Ende, M. (1988, 1992): Momo. Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Kvam, S. (1983): Linksverschachtelung im Deutschen und Norwegischen. Eine Kontrastive Untersuchung zur Satzverschränkung und Infinitivverschränkung in der deutschen und norwegischen Gegenwartssprache. Niemeyer, Tübingen.
- Stechow, A. v. & W. Sternefeld (1988): Bausteine Syntaktischen Wissens. Ein Lehrbuch der generativen Grammatik. Westdeutscher Verlag, Opladen.
- Velde, M. van de (1972): "Zur Wortstellung im Niederländischen und im Deutschen Satz" Linguistische Studien I Band 19, 76-125.
- Yoshimoto, B. (1994): Kitchen. Übersetzt von W. E. Schlecht. Diogenes, Zürich.

## 例文一覧

- /1/ Ich versuchte, mir mein Erstaunen nicht anmerken zu lassen. (Yoshimoto 1994: 20)
- /2/ und die Worte bewegten ihn so wunderbar, daß er zu beurteilen vergaß, ob ... (Bech 1995: § 115)
- /3/ Ich werde im folgenden zu zeigen versuchen, daß ... (Kvam 1983: 63)
- /4/ Im folgenden werden wir einige Fragen ... diskutieren und dabei zu zeigen versuchen, daß es kaum möglich ist, ... (Kvam 1983: 55)
- /5/ In der Notlage, in der sie sich befindet, wagt sich die Forschung nicht einmal einzugestehen, daß... (Bech § 115)
- /6/ Und außerdem bitte ich das Gericht, zu bedenken, daß es uns ganz mühelos gelungen ist, die geplante Versammlung zu vereiteln, indem wir den Leuten einfach keine Zeit dazu ließen. (Ende 1988: 113)
- /7/ »Gut«, sagte Nicola, »ich hätte das vielleicht nicht auf deine Tür schreiben sollen, Nino. ...« (Ende 1988: 20)

### 動詞の前置

- /8/ »Schaden kann es nichts«, entschied der Kapitän. (Ende 1988: 32)
- /9/ Denn hier, so meinten Sie, könne das Kind schließlich genauso gut wohnen wie bei einem von ihnen, und sorgen wollten sie alle gemeinsam für Momo, weil es für alle zusammen sowieso einfacher wäre, als für einen allein. (Ende 1988: 14)
- /10/ »die Musik ist nämlich von weither gekommen, aber geklungen hat sie ganz tief in mir drin. (Ende 1988:152)
- /11/ »Na, belobigen wird man uns ganz bestimmt nicht.« (Ende 1988: 127)
- /12/ Aber haben wollten sie alle eins, denn sie waren leidenschaftliche Zuhörer und Zuschauer. (Ende 1988: 9)
- /13/ Abschneiden wollte Momo sie nicht, weil sie vorsorglich daran dachte, daß sie ja noch wachsen würde. (Ende 1988: 11)
- /14/ Was die kleine Momo konnte wie kein anderer, das war: zuhören. Das ist doch nichts Besonderes, wird nun vielleicht mancher Leser sagen, zuhören kann doch jeder. (Ende 1988: 17)
- /15/ »Sie ist da«, murmelte sie gedankenverloren, »das ist jedenfalls sicher. Aber anfassen kann man sie nicht. ...« (Ende 1988: 152)
- /16/ Anrühren laß ich sie (=eine Puppe) dich, aber nur, wenn du mir Pipsi schenkst. (Bech 1955: § 138)
- /17/ zu frieren brauchst du auch nicht mehr. (Bech 1955: § 225)
- /18/ ausziehen brauchst du dich nicht. (Bech 1955: § 225)

### ねずみ捕り構文

- /19/ \*die Ratten, die Hubert fangen Günther ließ (Stechow & Sternefeld 1988: 409)
- /20/ \*die Ratten, die zu fangen Günther scheint (Stechow & Sternefeld 1988: 409)

### 動詞入れ替え

- /21/ Du hättest erst gar nicht zu kommen brauchen. (Ende 1988: 19)
- /22/ den wichtigsten Dienst, den der Berufene ihr selbst einst würde zu leisten haben (Bech 1955: § 62)
- /23/ ...daß er noch einmal den Strom des Lebens, der Freude, der Jugend so voll und drängend durch sein Blut könnte strömen fühlen. (Bech 1955: § 62)
- /24/ Sollte jemand darauf bestehen, daß klitische Pronomina direkt hinter die C-Position sich müssen stellen lassen können, dann... (Grewendorf 1988: 114)

/25/ daß er schien kommen zu können (Velde 1972: 113)

/26/ daß es braucht getan zu werden (Velde 1972: 113)

## 文献

- Bech, G. (1955): Studien über das deutsche Verbum infinitum, Band I. Kopenhagen.
- Bech, G. (1957): Studien über das deutsche Verbum infinitum, Band II. Kopenhagen.
- Bech, G. (1983): Studien über das deutsche Verbum infinitum. Unveränderte Auflage. Niemeyer, Tübingen.
- Evers, A. (1975): The Transformational Cycle in Dutch and German. Doctoral dissertation. University of Utrecht.
- Fanselow, G. (1989): "Coherent Infinitives in German: Restructuring vs. IP-Complementation"  
In: Ch. Bhatt & E. Löbel & C. Schmidt (Hrsg.) Syntactic Phrase Structure Phenomena in Noun Phrase and Sentences. Benjamins, Amsterdam.
- Grewendorf, G. (1987): "Kohärenz und Restrukturierung. Zur verbalen Komplexen im Deutschen"  
In: B. Asbach-Schnitker & J. Roggenhofer (Hrsg.) Neuere Forschungen zur Wortbildung und Historiographie der Linguistik. Festgabe für H. E. Brekle zum 50. Geburtstag. Tübingen.
- Grewendorf, G. (1988): Aspekte der deutschen Syntax. Eine Rektions-Bindungs-Analyse. Narr, Tübingen.
- Haider, H. (1986): "Nicht-sententiale Infinitive" Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik 28, 73-114
- Hayashi, K. (1994): ドイツ語及びオランダ語における動詞繰り上げについて. 修士論文, 北海道大学.
- Huang, C.-T. J. (1993): "Reconstruction and the Structure of VP: Some Theoretical Consequences" Linguistic Inquiry 24, 103-138.
- Stechow, A. v. (1984): "Gunnar Bechs Rektions-Bindungs-Theorie" Linguistics 22, 225-241
- Stechow, A. v. & W. Sternefeld (1988): Bausteine Syntaktischen Wissens. Ein Lehrbuch der generativen Grammatik. Westdeutscher Verlag, Opladen.

(大学院博士課程)